

+ 3 3 【なまぐさ】

村長さんの納屋に【なまぐさ】がでるといので、村びとたちが対策（たいさく）のために、村長さんの家の庭に集まりました。

ぼくは野次馬（やじうま）の一人として行きました。

こんなに大勢集まっても、何の役にも立たない、懐爺ひとりで充分だとぼくはおもっていましたが、いわないでおきました。

【なまぐさ】はその名のとおり、滅茶苦茶（めちゃくちゃ）生臭いおばけで、それは懐爺の臭さとはちがう。

懐爺は、草くさいけれど、【なまぐさ】は、血なまぐさいのです。「あの臭いはたまらんな。女中さんたちに掃除をしてもらったが、まるで駄目だったよ」

村長さんは頭を抱えていました。

「【なまぐさ】を退治するためには、納屋を焼いてしまうことすな」

村の長老の一人がいました。

「そうじゃそうじゃ」

と野次馬たちは声をあげました。

「やっちまえやっちまえ、火あぶりじゃ」

「【なまぐさ】なんか黒焦（くろこ）げじゃ」

と村びとたちも賛同しました。

なんとなく弱い者をよってたかっていじめる、雰囲気（ふんいき）があったので、

「そらあ、かたておちじゃのう」

とぼくは声をあげました。

みんながぼくを睨（にら）みましたが、ぼくは平気（へいき）で、こう付け足します。

「わしじゃったら、まずは【なまぐさ】とそうだんしてみるがのう。あんまりくさいから、なやをもやそうとおもうが、くろこげになりたくないなら、いますぐににげだしたらええ、としてみるのう」

村びとたちの反応は最悪でした。

「おばけ相手に相談なぞと、莫迦莫迦（ばかばか）しいこというなや」

「金ちゃんは、おばけの回し者だって噂があるでな」

「【なまぐさ】の肩を持つなら、金ちゃんも火あぶりじゃぞ」

「この村を護るためなら、人身御供（ひとみごくう）も必要なり」

村びとたちは血潮（ちしお）燃ゆる口吻（こうふん）をして、目を血走らせています。

こんな空気のなかで、私刑された無実の人をぼくはしっています。

こんな空気は懐爺が最も嫌うものです。

こんな空気が戦争を起こすのだと断言しています。

ぼくは危険（きけん）をかんじたので、

「わしがなんとかしたる。もんくはなかろう」

と声を張り上げました。

村びとたちは騒然（そうぜん）としました。

村長さんがみんなを制し、

「まずは、金ちゃんにまかせてみたらどうかな。とにかくわしゃ、生臭い臭いがなくなれば納得（なっとく）なんだからさ」

村びとたちは渋々承知しました。

ぼくは懐爺に助けを求めたかったが、そんな時間はなさそうだ。

それですぐに、納屋に入って行きました。

臭いのなんの、牛とか馬とか豚とかの屍骸（しがい）の、血なまぐさい臭いに似ていました。

ぼくは鼻をつまみながら、

「おうい【なまぐさ】やい。おまえのようきゅうをおしえてくれんかのう」

するとどこからか、変な声がきこえます。

「あいいん」

変というのは、声そのものが血なまぐさかったからです。

どこから声がきこえるのか、よくわからなかったので、ぼくは天井にむけて、納屋のなかに積み重なっていたさつま芋を投げつけました。

「いたあいん」

変な声。

「いたいかのう」

また投げつけました。

「いたいよん」

変な声。

「おばけのくせに、いたいかのう」

また投げつけました。

「いたいったらん」

変な声。

「【なまぐさ】でてこい、わしじゃ」

「金ちゃんかいん。待ってたよん。懐爺がくるかとおもったがなん。金ちゃんでもええよん」

やっぱり声だけ。

「にんげんはさ、そのなまぐさいにおいが、とてもふゆかいなんじゃ。なんとかしてもらえんかのう。わしはひあぶりなんぞ、きれいじゃからのう」

「人間は自分勝手だなん。この血なまぐささは、人間のせいだよん。牛や馬や豚を殺して喰うんだからなん。残酷な人間に、よく文句がいえたもんだなん」

「わしもおなじいけんじゃ。うしやうまやぶたは、わしのともだちじゃからのう。ともだちをころされて、わしはつらいぞ」

「金ちゃんなら、わかってもらえるとおもっていましたよん。人間がいつまでも、そういうことをやりつづけているあいだは、【なまぐさ】は消えない、消えるわけにはいかないよん」

【なまぐさ】はこころなしか涙声でした。

「きもちはわかるがのう。どうして、そんちようさんのなやなんじゃ」

「村長の一家は、動物の肉が大好物なのさん。毎晩、喰っとるが、焼肉とかすき焼きとかよりも、生肉が大好物でなん。だからここにでたんだよん」

「そうかい。ならば、わしがそんちようさんにきつく、せっきょうをするでよ。なまにくはけしからん。なまにくくえるんは、なまぐさぼうずだけじゃ。ここはわしのかおをたてて、すみやかに、きえてくれんかのう」

「わかったよん。金ちゃんの顔はつぶせないよん。消えるよん」

【なまぐさ】は顔（すこぶ）る素直でした。

「すまんのう」

「でももし約束がちがったら、こんどは村長の母屋（おもや）にでるからなん」

「でろでろ。みからでたさび、いんや、みからでたくされじゃ」

「たのむよん、たのむよん」

というわけで、【なまぐさ】は消えました。

「よかったよかった。万事解決（ばんじかいけつ）、納得よ」

村長さんは歓喜の声をあげました。

それでも村びとたちが納得の顔をしていなかったのは、納屋を焼きたかった、そうすることで村長に対する日頃の鬱憤（うっぷん）をはらしたかったからでしょう。

村びとたちが去ると、ぼくは村長さんに話があるといいました。

村長さんは家の中で話をきこうと答え、立派な応接間に案内してくれました。

「金ちゃん、おかげで納屋を焼かずにすんだよ。あんな納屋は惜しくはないが、今日は風が強いから、母屋に焼け移ったら、えらいことだからね」

「そうじゃのう。わしもそれをしんぱいしてのう」

本当はそんな心配をする余裕はありませんでした。

「お礼に、旨いもんを喰わせよう。町から取り寄せた、新鮮な生の、牛刺し馬刺しだよ」

げげ。

「わしはそんな、ちなまぐさいもんいらん。そんちょうさんにひとつ、いわせてくれや」

「何なりと」

「にんげんはどうぶつじゃろ」

「動物に決まっているさ」

「それなのにどうして、おなじどうぶつの、にくをくうんじゃ」

「それはつまり、旨いからさ。それに滋養もあるで」

「うまくて、じょうがあれば、なにをくっても、ええんかのう。にんげんをくったって、うまくて、じょうがあるかもしれんぞ」

「まあそう、かしこばらんでも。祠の爺は、遠くまで戦争行って、人肉喰うたらしい。生きるためには人間はなんだってやるのさ。なんだって

喰うのよ。だからって、そんな人間を醜悪（しゅうあく）とおもっているものかね。ましてや、牛や馬や豚は、人間に喰われるために、神様に生かされているのかもしれないよ」

「そんなかみさまは、わしはしらんのう」

「牛や馬や豚は、殺されたって喰われたって、ばけてでないだろう。それは殺されたって喰われたってしかたないと、かんがえているからさ」

「そんなちょうは、のんきじゃのう。わしは、うしやうまやぶたが、ころされるとき、どれほどかなしいこえをあげるか、ようしっとる」

「あれは悲しい声ではない、悦（よろこ）びの声だ、とだれかがいったとしたなら、わしや信用するがね。金ちゃんはこどもだからわからないだろうが、男と女がまぐわうとき、女は悲しい声に似ている悦びの声をあげるんだよ。それから絶頂になると女は、死ぬ死ぬと悦びの声を発するんだよ」

「ごまかすでない、そんなちょう。わしがそんなことしらんとでもおもうとるのか」

じっさいは、まったく、しらない。

「あれま、失礼しました」

「あれとこれ、これとそれはちがうぞ。たとえばなしとほんものはなしとは、はなしがちがうぞい」

「まあそんなに怒らずに。そろそろ牛刺し馬刺しもくるで、機嫌をなおしてくれな」

「そんなものくうかい。ええかそんなちょう、また【なまぐさ】がでてきても、わしはもうしらんからのう」

捨て台詞（ぜりふ）を吐いて、ぼくは村長宅を後にしました。

そしてそのまま懐爺のところに行きました。

「かいじい、せんそうで、にんげんのにく、くったってえのは、ほんまか」

「それは噂にすぎません。〈ばけもの〉とよばれていた若いころのわたしなら、人間の肉でも喰うだろうという先入観です。たしかに戦場は飢餓状態でしたが、戦友の肉を喰らうくらいなら、餓死したほうがましだとかんがえていました」

「そうかそうか」

ぼくは懐爺の答に満足をしました。

「金ちゃんは、どうしてそんなことをきくんですか」

「【なまぐさ】がでたんじゃ。わしは【なまぐさ】がわるいとはおもわん。【なまぐさ】がでるほど、にんげんはわるいんじゃ」

「悪いのが人間です。人間がいなければ、世界はどれだけ平和で美しいことか。それでもわたしたちは人間ですから、できるだけ悪いことをしないよう、なんとか謙虚に努力するしかありません。それが人間の一番の使命なのでしょう」

「そうかのう。わしは、にんげんのしめいとやらは、わるいことをしないよう、なんとかするんじゃなくて、ただしいことをするよう、なんとかするのかと、かんがえていたわい」

「その正しいことって、なんでしょう。わたしは大昔、悪人を何人も殺（あや）めたことがあります。自分では正しいことをしたとおもっていました。けれども、悪人だときめつけたのは、わたしであって、自分が正しいとおもいこんだのも、わたしです。万一わたしという人間が、不完全な人間だとしたなら、わたしの判断なぞ、ろくでもないものかもしれない。世界には、自分たちだけが正しいと言い張る、人間たちであふれています。そうしてそういう人間たちこそが、矢鱈（やたら）に戦争を起こすんです」

ぼくは沈黙しました。

なにがなんだかわからなくなった。

「きょうは、ねむらないで、かんがえてみるからのう」

そう言い残しましたが、なにせこの日は疲れ果てていたので、帰るとすぐに眠ってしまいました。

そうでした、うっかり言い忘れそうになりましたが、件（くだん）の【なまぐさ】は、もうでることはありませんでした。

村長さんの家では、あの事件以降、生肉を食べるのをやめました。

それで【なまぐさ】がでなくなったのかどうかは、【なまぐさ】にきく機会もないので、はっきりしたことはいえません。